



社会人大学院を終えて ～つれづれなるままに～

聖マリアンナ医科大学病院 循環器内科 貝原 俊樹 (東京 32 期)

この文章が発行される時点で、大学院を卒業して半年が経っています。ありきたりの表現ではありますが、振り返るとあっという間の 4 年間でした。義務年限真っ只中の医歴 6 年目に社会人大学院に入学しましたが、入学前はへき地（離島）医療と両立出来るのか正直不安でした。都庁サイドも「へき地医療に迷惑を掛けなければ OK」というスタンスだったため、どちらも完遂せねば、というプレッシャーはあったかもしれません。



ちなみに東京卒の本学卒業生は、義務年限中原則として離島に計 4 年間派遣されます。島外の高次医療機関には地理的に簡単には搬送出来ません。もちろんやりがいはありましたが、どこまで島で治療するか、どこからは内地に送るかというトリアージがとりわけ大事な職場でした。最近では訴訟問題も対岸の火事ではなく、オーバートリアージもやむなしと判断したものの、高次医療機関から「なんでこの軽症をへりで搬送するのか」という叱責を受けたのはいい思い出です。私の場合、まず人口約 2300 人の新島に 2 年連続赴任、その後内地医療機関を挟んで、次の 2 年は人口約 550 人の式根島、そして再度新島でした。新島には計 3 年間赴任したことになります。良くも悪くも医師として刺激的な日常を送れる職場でした。御興味がある方は島の公式ホームページを 1 回見て頂ければと思います。サーフィンはやりませんが、見ていると本当に気持ち良さそうでした。

話が脱線しましたが、診療をしながらのフィールドワークは確かに大変でした。少し早めの時間から外来を始めたり、場合によっては土日も診療所でデータ整理や患者対応をしたり、診療所の数少ない冷凍庫を 1 年以上尿検体で占拠したり…。コメディカル含め現場スタッフの協力無くては成り立たない仕事でした。感謝するとともに、論文として成果が出た時には報告する、それも自分のやりがいの 1 つでした。今思えば、他人のデータベースを借りてデータを出すのではなく、自分のデータベースを汗水垂らして作ったのは勉強になりました。一から研究を作り上げる大変さは実際やらないと分からず、論文を読む時の姿勢にも影響を与えました。

自分の研究は、血圧データが患者から医師へと自動転送される遠隔モニタリングシステム搭載の新型血圧計を使用したものでした。詳細は省きますが、新型血圧計そのものに関する研究 (Medlink 研究^{1) 2)}) は新島中心に、同血圧計を使用して家庭血圧変動性というパラメータに着目した研究 (Real-BP 研究³⁾) は式根島中心に行い、離島での時間を有効活用出来ました。当時、そもそも離島で循環器内科の研究と言って何が出来るのだろうかという悩みがありました。心臓カテーテル検査や核医学検査などは当然出来ません。その中で、血圧、さらに新型デバイスを使用した血圧計測といった、離島でも施行可能かつ新規性のあるテーマを与えてくださった大学には本当に感謝しています。実際に、研究会や学

会で循環器内科学+地域医療学という形で興味を持ってくださる方も多くいらっしゃいました。

医師になってから大学病院で働いた経験は無く、大学院が全く身近でなかった自分にとって、地域医療の第一線と大学院生を兼ねる社会人大学院入学は一つの冒険でした。しかし、行ってよかったです。よく学位は「足の裏の米粒」などと揶揄されますが、当然ながら学位取得までのプロセスが大事であり、学位自体は「ああ、ああいうことをやったんですね」といった経験の共有という意味で、医師同士のコミュニケーションにおいて分かりやすくいいツールです。具体例を挙げるときりはありませんが、大学の統計学の先生に統計を教えて頂いたり、そこまでコネクションのない自分でも研究会などでオピニオンリーダーと話す機会を持てたり、地道に研究成果を発表していると自然と人の輪も広がっていった印象です。

さて、昨年度で本学の義務年限が終了しました。臨床面でも研究面でもより先進的な仕事に携われたらという思い、留学を考えると30代の今だという気持ちもあり、地元の近くの大学病院に就職することに決めました。社会人大学院に入学していなかったらこのような考えさえ浮かばなかったでしょう。考え方の幅が広がりました。そして、この4年間地域医療では臨床のマインド、大学院では研究のマインドを教えて頂きましたが、それらはどこで働いても変わらない。最終的には自分がどう思うか、どう考えるかなのでしょうか。今後もこの4年間で教わった精神、知識、コネクションを生かし、臨床と研究でやりがいのある仕事を出来ればいいなと思っています。地域医療に従事している最中の（臨床研究に対してハングリー精神がある）本学の卒業生にとっては特に、社会人大学院をお勧めします。

- 1) Kaihara T et al. [Home BP monitoring using a telemonitoring system is effective for controlling BP in a remote island in Japan.](#) J Clin Hypertens (Greenwich). 2014 Nov;16(11):814-9.
- 2) Kaihara T et al. [Evaluation of day-by-day variability of home blood pressure using a home blood pressure telemonitoring system.](#) Blood Press Monit. 2016 Jun;21(3):184-8.
- 3) Kaihara T et al. [Maximum home blood pressure readings are associated with left atrial diameter in essential hypertensives.](#) J Hum Hypertens. 2018 Jun;32(6):432-9.

地域医療オープン・ラボNews Letter原稿募集

地域医療オープン・ラボでは、**自治医大の教員や卒業生の研究活動**を学内外へ発信するために、「自治医科大学地域医療オープン・ラボNews Letter」を定期的に発行しています。<http://www.jichi.ac.jp/openlab/newsletter/newsletter.html>

1. **自治医大の教員や卒業生の研究活動をご紹介ください**
2. **自薦・他薦を問いません**
3. **連絡先：地域医療オープン・ラボ openlabo@jichi.ac.jp**

[発行]自治医科大学大学院医学研究科
地域医療オープンラボ運営委員会

事務局 大学事務部学事課 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1
TEL 0285-58-7477/FAX 0285-44-3625/e-mail openlabo@jichi.ac.jp
<https://grad.jichi.ac.jp/>